

# 巻頭言

## 遠い三陸

神庭重信 日本精神神経学会副理事長  
Shigenobu Kanba

今年6月に閣議決定された日本再興戦略では大学改革も強調されている。そこで、関連する資料を鞆に詰め込んで、東京駅から東北新幹線“はやて”に乗り込んだ。

戦略の基本は、科学技術を唯一の資源とする日本の再興は、ひとえに研究と開発にあり、それを推し進める人材の教育が鍵を握るといふ、至極もつともな考え方である。具体策として、世界と競う「スーパーグローバル大学(仮称)」の創設、研究大学・研究開発法人のイノベーション機能強化、政府研究開発費を対GDP比1%に増額、若手・外国人研究者の大量採用、留学生(日本への留学生含む)の増員、年俸制の本格導入、大学発新産業を10年で20創出などの目標が並んでいる。短期的成果を求めて熾烈な競争が起こるのだろうか。

日本はアジアで唯一、新薬開発力を有する国である。この「ものづくり力」を生かして医療関連産業をさらに活性化するともある。すでに全製造業の納税額の10.6%を製薬企業が占め、自動車産業の6.5%を大きく上回っている。この基幹産業のさらなる活性化プランが、賛否両論ある日本版NIHの創設である。全国の橋渡し研究拠点や臨床研究中核病院などと有機的に連携し、革新的な医薬品・医療機器を世界に先駆けて生みだそうとする計画である。研究に専念できる理工学部と違い、診療・教育の占める割合が大きい医学部は舵取りが難しくなる。

時を同じくして世界のライフサイエンスの潮流には変化が起きていた。今年1月、EUはHuman Brain Project 10カ年を立ち上げ、4月にはオバマ政権が同じく10カ年計画のBRAIN Initiativeを発表していた。アプローチは異なるが、どちらも、脳内神経回路の全容を明らかにし、脳の作動原理を知り、精神神経疾患の克服に迫ることをめざしている。人類の新たな知と産業が生まれる可能性を秘めた未開の分野として脳科学を位置づけたのだ。文科省も日本独自の脳科学研究を立ち上げる準備に入っており、本学会も即応して「精神疾患克服に向けた研究推進の提言」を発表し

た。これらの資料を読み終えた頃、“はやて”は夕暮れの盛岡駅へと到着した。

翌朝から岩手医大が統括する「岩手県こころのケアセンター」のチームに合流し、北三陸の陸前高田市と久慈市近郊の野田村を訪れた。いずれの地も盛岡から120~130 km離れている。延々と路を走り、針葉樹に覆われた山脈を越えて行かねばならず、現地に着くまでに2時間半はかかる。冬はさらに遠いに違いない。山腹から湾内に漁船の姿がぼつぼつと見えた。いまだに防波堤が修復されていない海岸線も目についた。高台の造成地も思ったほどできていない。密集して建てられている仮設住宅には今になっても大勢の方が暮らしている。復興は思ったよりも進んでいない。

陸前高田市では、健康状態をお尋ねするために、倒壊をまぬがれた家々を戸別訪問した。高齢者がひっそりと暮らしていた。チームはこれまでに約5,000戸の調査を終えようとしていた。野田村では、こころの健康相談を担当した。NHKのドラマ“あまちゃん”で有名になった久慈地域は4万弱の人口を抱えている。ここには200床あまりの精神科病院があるだけで、院長以下3名で診療を続けており、県立病院精神科には週に3日ほど医師がきて、日に50人の外来をこなしているという。医療は限りなくやせ細っていた。震災直後から2年以上にわたり、戸別訪問やこころの健康相談を続けているのは、「精神科医療への負担を少しでも減らしたいからです」とPSWの方が言っていた。

2日間ではあったが支援を終えて帰路についたとき、背を向けて遠ざかる自分に少しくうしろめたさを感じた。例えば2年前のいわき市のときも同じ気持ちを抱いた。しかも今回は、直前に政府の描く未来像を読んでいただけに、その像と現にある三陸の姿とを、重ねることはおろか、つなげることもすらもできずに、途方に暮れてしまったのである。

ぼんやりと車窓の夜景を眺めながら、遠く離れた「2つの復興」のことを考え続けていた。